2014 年度 JEARN 活動報告書

国際協働学習実践集

Interactive Collaborative Learning with the World

第 20 回 iEARN Conference 2014 アルゼンチン大会

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構

（通称） JEARN　http://www.jearn.jp/japan

目　次

	題　　名	所　　属	名　前	頁
1	防災世界こども会議（NDYS）2014-2015	防災世界こども会議実行委員長 プロジェクト創始者	納屋　淑恵 岡本　和子	1
2	課題解決型「ICT を活用した国際協働学習」の実践	神戸市立葺合高等学校	茶本　卓子	2
3	テディベアプロジェクトでの国際交流	所羽曳野市立高鷲小学校	川越・松本 山本・川崎	4
4	小さな子供たちに世界を知ってもらおう	サークル ABC	坂本　雅子	7
5	Girls Rising	啓明学園中学高等学校	関根　真理	8
6	Holiday Card Exchange Project の活動報告	東京慈恵医科大学	栗田　智子	10
7	Look Asia Project　2012-2014	（元）帝塚山泉ヶ丘中学校高等学校	辻　陽一	12
8	Anne Frank　Meet &　Learn	JEARN	高木　洋子	14
9	Adobe Youth Voice　2014	AYV Japan 高木　洋子	伊東　文杉 杉本　範雄	16
10	iEARN　Conference　in　Argentina　報告	JEARN	高木　洋子	18
11	AYV 金沢センター研修会報告	金沢星稜大学	清水　和久	20
12	Adobe Youth　Voice オンライン研修コース体験記	奈良県立法隆寺国際高等学校	山本　秀樹	22
13	AYV コースに参加して	北陸学院高等学校（石川県）	平田　純	23
14	Hiroshima for Peace	JEARN	高木　洋子	24
15	青少年ペンフレンドクラブ活動報告	日本郵便株式会社 本社切手・はがき室	青少年ペンフレンドクラブ	25
16	大学生による 100 人村ワークショップの活動報告	金沢星稜大学	清水　和久	26
17	平成 27 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）指定の報告	（元）名古屋市立名古屋商業高校長	栗原　寿男	28

防災世界子ども会議（NDYS）2014-2015

防災世界子ども会議実行委員長　納谷　淑恵
プロジェクト創設者　　岡本　和子

1. はじめに

「防災世界子ども会議」は、2005 年、阪神・淡路大震災から 10 年を機に始まりました。その集大成として、ネットワークに参加した世界各地の子どもたちが、1 年に一度世界大会やテレビ会議で顔を合わせます。

２．目的と方法

21 世紀、世界の教室はつながり、子どもたちはさまざまな国・地域の防災の「知恵」や災害から学んだ「教訓」を共有し、災害から命を守り、災害リスクを軽減する学びに取り組みます。

ICT（情報コミュニケーション技術）を活用し、『防災・減災』というグローバルな課題に多様な価値観をもつ人々と共に考え、連携・協働で取り組み、グローバルなマインドを培います。

３．活動内容

（１）2014 年度の活動

阪神・淡路大震災から 20 年を迎える 2015 年 1 月に 愛知県豊田市で 「防災世界子ども会議」を開催いたしました。豊田市の協力のもと、多くの中学生の参加があり、日本の高校生並びに世界 10 か国から集まった参加者とともに、プロジェクトの発表並びに、NDYS2015 宣言文を採択・発信しました。

「防災世界子ども会議 2015　in　とよた」
URL：http://ndys.jearn.jp/2015/index.html

2015 年 3 月 15 日、仙台で開催の第 3 回国連防災世界会議の関連イベントであるパブリックフォーラムの「防災教育フォーラム（パネリストとしてユネスコ本部から ESD 最高責任者も参加）」の中で、「世界に広がる防災の輪」という形で、「防災世界子ども会議2015 in とよた」の様子が放映され、ネットワークを活用した防災教育の促進事例として紹介されました。

（2015.3.19）

（２）2013 年度の活動

平成26年度スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校　神戸市立葺合高校の発表

プロジェクト参加校は、JEARNの会での発表や、アイアーンのコラボレーションセンターで情報を共有し、成果を発信しています。神戸から、台湾、トルコ、ロシアどセルビアをつないだテレビ会議を実施し、ＮＤＹＳメンバーの交流がなされました。また、台湾のシンディによる中国（深セン）でのワークショップでのポストカード作りなど独自の活動も行いました。

４．成果と課題

10 年を目標にスタートしたプロジェクトもついに 10 年を経過し、これまでの活動とこれまでに培った繋がりを大切にしつつ、新しい参加者を募り、新たな取り組みを行っていきたいと考えます。

課題解決型 「ICT を活用した国際協働学習」の実践

防災世界子ども会議（NDYS）と葺合高等学校の 10 年

神戸市立葺合高等学校　茶本　卓子

本校では、国際科２年生の「総合的な学習の時間」を「グローバルスタディーズ」と名付け、週２時間、英語で課題研究を行っています。その中に「防災」をテーマにしたプロジェクト学習があり、自然災害の発生メカニズムや減災ための対策を学び、安全マップや防災学習ゲームを作成しています。NDYS のネットワークに支えられ、この取り組みを、課題解決型「ICT を活用した国際協働学習」へと発展させることができました。

1. はじめに

防災世界子ども会議（NDYS）は、阪神・淡路大震災の 10 周年事業として、2005 年１月 18 日、兵庫県淡路夢舞台で第 2 回国連防災世界会議「パブリックフォーラム」を開催され、本校はこのスタート時より、NDYS へ参加しています。

神戸市の中心に位置し、震災で３名の在校生を失った高校として、私たちには問題点を考察し、被害を最小に食い止めるため、防災学習を進め、発信していく責務があると考え、「阪神大震災の教訓」と題して英語と日本語で発表しました。この日、トルコ、イラン、インドネシアから参加の同世代の発表を聞き、またテレビ会議を通して、大地震の被災地であったイランのバムの高校生と震災からの復興について英語で意見交換をしました。

NDYS2005　イラン・バムとのテレビ会議
第２回国連防災世界会議「パブリックフォーラム」

あれから 10 年、iEARN という組織が持つ世界規模のネットワークと ICT を駆使することで、グローバル時代における双方向の国際協働学習が可能となり、この課題解決型の学びに継続的に取り組んでいます。

２．目的と方法

NDYS の国際協働学習は、年度当初に事務局が示したテーマと課題について参加希望校が、アイアーンのコラボレーションセンターをプラットフォームとして、Web 上で情報発信、共有しながら課題解決型学習を展開します。

そのまとめとして、ネットワークに参加した世界各地の小中高生が一堂に集い、合宿を行います。寝食を共にすることで、文化や宗教の違いを超えて、互いの理解が深まり信頼関係が構築されていきます。ICT を使ったオンライン学習やテレビ会議に加え、直接対話をしながらさまざまな国籍の若者が共同宣言を作り上げるためにディスカションをします。学びあい、異文化交流の機会で友情の輪を広げ、子どもたちの絆をさらに深めています。

教員にとっても意欲の高い経験豊かな海外の先生方と目標をひとつにして課題研究を深めることができるこのプログラムは大きな刺激になっています。

３．活動内容

実際の活動としては、年度のテーマ（2014 年は、『異常気象と防災・減災について』）について、自国の現状を調査し、解決への対策を調べ、発表し、意見交換をしました。

さらに、課題や解決に至ったプロセスをレポートにまとめ、NDYS の Web 上に公開します。事前に各校のレポートを読んだ後、世界各地からみんなが集まった会議で、聴衆に理解してもらいやすいように、ステージ上で写真や図表をつけ、パワーポイントを用いた発表をしています。

NDYS2015
「防災世界子ども会議 2015in とよた」での発表

持参したポスターの前で各グループが一斉に、目の前の観客と双方向の意見交換や質疑応答を交えながらプレゼンテーションを行うこともあります。

さらに参加者が一堂に集まって防災関連の専門家の基調講演を聴いたり、問題解決のためのディスカションを行ったり、ポスターや安全マップ、絵、オブジェなどを展示するなど、情報共有をします。そして最終日、共同宣言文を採択・発信します。

NDYS2015　参加国代表による「NDYS2015 宣言文の作成」
通訳＆司会進行を担当

使用言語は英語と開催国の母国語を使用し、バイリンガルで進行し、生徒たちは通訳や会議の司会進行を引き受けながら、互いのコミュニケーションを深めています。

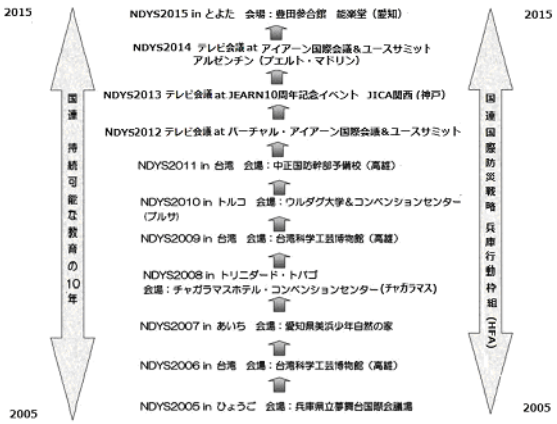
英語が使えることは必要ではありますが、正しい知識に裏打ちされた意見をわかりやすく述べる力や言語・文化の違う人たちが気持ちよく意見交換ができる場を設定できる柔軟性と思いやりを持つことが大切であると考えます。

NDYS2014　アイアーン世界大会（アルゼンチン）
発表音声付き英語によるプレゼンテーションで参加

４．成果と課題

淡路夢舞台から 10 年、参加した生徒たちは、自信と行動力をつけ成長してまいりました。　課題解決に取り組む形の国際協働学習は、一つの学校では取り組みにくいものです。それが JEARN の手にかかれば、ネットワークを使って難なく実現してしまいます。少しでも国内外の学校が積極的にこの取り組みに参加してもらえることを希望します。そのためにもさらに意味のある斬新な企画とその成功を目指していければと考えています。

図１　これまでに参加した会議



提供：防災世界子ども会議実行委員会

テディベア（くま）プロジェクトで国際交流

～台湾、ベラルーシ、ロシア、アメリカ～

所羽曳野市立高鷲小学校平成 26 年度 5 年生担当教員
川越・松本・山本・川﨑

1. はじめに

iEARN と言う、先生たちの国際交流を助ける、国際的な NPO 団体があります。そこでは様々なプロジェクトが進行しています「原住民プロジェクト」「反・子ども労働」「いじめについてのプロジェクト」「防災世界国際会議」「貧困とホームレス」「まちんと（松谷みよこ）を共通教材にするプロジェクト」などです。その中でも人気の高いプロジェクトである「テディベアプロジェクト」に昨年度参加しました。その活動内容は、ぬいぐるみのくまを留学生に見立てて、交換することから始まります。テディを受け取ったクラスでは、テディに代わって学校の様子などを日記に書いたり、メールで様子を知らせたりします。テディを様々な行事に参加させ、その様子を交換することで、お互いの学校文化を知ることができます。また、テディが毎日、順に子ども達の家に泊まり、その様子を知らせることで、自国の生活の様子を交換することができます。

２．活動内容

（１）パキスタン

一番初めに、コンタクトがとれた国がパキスタンでした（９月はじめ）。2，3 日後に打ち合わせをスカイプで行いたいと連絡がありました。ですが、羽曳野市はインターネットのラインを外に開いていないので、市との交渉に数週間かかっているうちに、先方と連絡がとれなくなりました。また、先方は子ども達の英語のスキルアップの方法として、このプロジェクトを利用したい様子でした。異文化交流を主な目的とする私達との思いとの違いを感じ、連絡がとれなくなったのかも知れません。

その数カ月後（12/16）にパキスタンのある学校がイスラム過激派組織の襲撃を受けて生徒教員 110 数名が亡くなるという事件が起きました。その学校が襲われた理由は「英語教育など西洋化教育を進めていた。」と言うものです。その学校も iEARN プロジェクトの参加校でした。国際交流を進めていると、この様な世界の動きを、私達自身が間近に感じることがあります。

（２）外国から届く様々なメッセージ

それぞれの国から、様々な形でメッセージが届けられました。郵送される小包にテディとカードや、その国の雰囲気を感じ取れるものが入っていました。台湾からは正月を祝う張り札、提灯、スウェーデンからは国の風景が写ったカレンダーといったものです。日常の様子の交換はメール（ベラルーシ、スウェーデン）、会員制の SNS（ロシア）、GoogleDoc の共有（USA）、専用 Blog（台湾）などです。本校はメールにファイルを添付すると言う形で送りました。（情報リテラシーの差を感じました。）

自分達が送ったくま（１組：ショコラ　２組：どらえもん　３組：くまたろう　学年：ブラック）が行った先で向こうの子ども達とどんな風に生活をしているかが、写真と文で送られてきました。その写真から向こうの国の雰囲気を感じ取ることができました。

その他、向こうの小学校の時間割を送ってもらったり、その国特有の遊びの仕方を教えてもらったりしました。向こうからは「ランチは教室で食べるのですか。家から持ってくるのですか。学校で用意されるのですか。」といった質問も受けました。

（３）１組：ベラルーシ「マイケル」

マイケルと一日過ごす児童に、日記帳とデジカメを渡しました。子ども達はデジカメで学校での様子を喜んで撮影していました。様々な行

事（音楽会・参観・球技大会・卒業式練習 etc.）や授業や給食、そうじの様子などです。また、毎日順番に家にマイケルを連れて帰り、一緒に食事をしたりお風呂に入ったりしていました。休みの日には野球の練習に連れて行く、一緒に旅行に行くなど、子ども達は予想以上にマイケルをかわいがっていました。

良かったと思うことは、マイケルが子ども達の人間関係の潤滑油の様な役割を果たしていたことです。席替えで班が新しくなった際、一緒に写真を撮る、マイケルのポーズを一緒に作るなどの活動の中で、男女が関わり合い、打ち解けていく様子が見られました。面白かったのは、行事の中での応援団にも参加させたり、クラスの中でお笑いを真似して楽しんでいる時、子ども達は自分たちの ♪ラッスンゴレライ♪ にもマイケルを登場させたりしていたことです。

子ども達はたくさんの楽しい時間を、マイケルと過ごしました。マイケルが旅立つ（ベラルーシに帰る）時には全員がマイケルと握手をして別れました。

（4）2組：ロシア「リーシャ」

当たり前のことですが、国際交流というのは相手があって初めて、始められます。2 組は、一番初めにパキスタンとコンタクトがとれました。けれども、先に述べたように、うまく交流を始めることができませんでした。パキスタンからの連絡待ち、次に新しい国とコンタクトをとろうと四苦八苦している間に、ずいぶんと時間が立ってしまいました。1 組、3 組にかわいいくまが届いている様子を横目に見ながら、子ども達はじっと待っていました。ロシアとコンタクトがとれて、くまのリーシャが来たのはようやく 2 月初めぐらいになってからでした。長い間、待っていたので喜びも大きかったように思います。

リーシャはメッセージカード、手紙、伝統的な人形といっしょに送られてきました。それらの品々から、ロシアの文化に触れることができました。子ども達はリーシャを家に連れて帰って、いっしょに「ひなまつり」を祝ったり、食事やお風呂、色々な遊びを通じて日本の文化を知らせることができました。お別れの時には、クラス全員がなごり惜しく握手をしていました。本文は２１文字とする。

（5）3 組 U.S.A「ヌードル」

テディベア交流実行委員の一人女児Ａが熱心に毎日、ヌードルのその日の宿泊先をコーディネートし続けました。（滞在中、クラス児童の家を 4 巡しました。）　授業の中では、習字の筆をもたせたり、いっしょに理科の実験をしたりしていました。

奈良公園への遠足にいっしょに行った時の様子などを先方にメールで送りました。合わせて神社やお寺の説明・お参りの仕方など日本の慣習を伝えました。先方からも自己紹介と、我がクラスから送った『ヌードル』と出会っての気持ちを文にして送ってくれました。もうすぐ『ヌードル』とお別れと言う時になり、ある児童が次のような作文を書きました。

Q：1 年間で友達から学んだことは何ですか？

【みんな･ヌードル】　男児 B

みんなから、いっぱい学びました。その中でもヌードルです。人形だけどただの人形ではないということが分かりました。人形でも大切にすることが分かった。

子どもたちはお別れの直前に盛大なお別れ会を開きました。（2 時間も！）ヌードルの登場する劇・ハンカチ落としならぬヌードル渡し・お笑いコーナーの ♪武勇伝♪ に登場させたりしていました。大切な友だちが旅立つ前のような温かい雰囲気でした。そして『ヌードル』がいなくなった後、クラスにぽっかり穴が空きました。「何か、大事な大きな行事が終わった後みたい。不思議だけど、ただのくまの人形じゃなかった。」とある男児がつぶやいていたのが印象的です。

（6）番外編　スウェーデン・台湾

他に本校と強く交流を望んでくれた国が、台湾とスウェーデンです。もうすでに 3 カ国と交流をしていたので断ろうとしました。しかしながら「台湾」と言う国は自分にとって特別な国でした。4 年前の東日本大震災が起きた後、児童と震災学習をすすめていて知ったことは、台湾はどこの国よりも早く、多くの支援を日本にしてくれた国ということです。そこで、台湾か

らの申し込みをクラスではなく学年で受けることにしました。

その旨を先方に伝えると、驚いたことに「震災の時、教室の前に募金箱を置き、日本の支援を子ども達に呼びかけた。」と、その時の写真と共に返事をもらいました。その先生の気持ちがとても有難かったです。

スウェーデンの先生は、テディ交流ではなく純粋に文化交流をしたいと強い気持ちを持っておられました。北欧圏からの日本への交流の申し込みは珍しいので是非、とJEARN（iEARNの日本支部）から勧められ、受けましたがあまり時間もなく充分には交流できませんでした。申し訳ないことをしました。

３．成果

外国語活動の授業で、プロジェクトの存在が役立ちました。あいさつをする、ジェスチャーをすると言う活動に、子ども達には想定する相手があるからです。外国語活動は伝える気持ちが大切だと、ずっと教えてきました。この交流中に、相手国にビデオレターを作ることにした時、子ども達はとても積極的に表現していました。相手がいることで、英語をしゃべりたいという意欲はとても高まりました。

クリスマスには、それぞれの国へクリスマスカードを送りました。子ども達はカードといっしょに送るものとして、日本らしいものと言うことを意識していました。折り紙を折って、中に入れました。相手を喜ばせようという意識が高かったと思います。

外国語活動の授業の最後に、各クラスでそれぞれのくま達とのお別れ会をしました。日本を紹介するカードを書き、歌を歌いお別れしました（その様子もビデオレターにして送りました。）。読んでくれる人がいる、見てくれる人がいる…。具体的な相手がいることで子ども達の気持ちはとても高まったのだと思います。学年の終わりに、外国語活動のふり返りを書かせたところ、「もっと英語を勉強して、その国へ行ってみたい。」「もっと英語を勉強して、自分の思っていることを話したい。」「色んな国の言葉を話したい。」と言う感想がありました。

子ども達は「向こうの子ども達に会いに行きたい。」とも言っていました。そして自分たちの代わりに会いに行っているのが相手の国々に送ったくま達であり、会いに来てくれているのが送られてきたくま達です。子ども達にとってくま達は、ただのぬいぐるみではなく、自分たちのメッセージを伝える外国から来た大切な友だちでした。「向こうに帰ったら、日本であったことを伝えてね。」とテディの日記に何人もの子どもが書いていました。

もう６年生にも近い子ども達が、くまを通じて感じていたものは、言葉では説明できない不思議なものだった気がします。取り組んだ私達教員にとっても不思議な感覚です。生きてはいないけれど生きているような、学習も遊びも行事も一緒に経験をして、家に連れて帰ってはお風呂やベッドも共にして、クラスのもう一人の友だちのような感覚です。くま達はたくさんの思い出を持って外国に帰りました。外国に行ったくま達はたくさんの思い出を作って日本に帰ってくるでしょう。みんなで温かい気持ちで出迎えてあげ、「どうだった、向こうのお友達は･･･？」と尋ねてみたいです。子ども達はくまを通じて、外国を肌で感じていました。

４．課題

英語を介しての交流となります。残念ながら私達はそれほど英語に堪能ではありません。そこで先方とのやりとりに四苦八苦しました。おそらく向こうの思いと、こちらの思いを充分にやりとりできていなかったと思います。なかなか連絡がとれないと言う事態も何度もありました。自分たちも歯痒い思いをしましたし、それ以上に先方にも、ご迷惑をおかけしたことと思います。けれどもそれ以上に得ることの多い活動です。是非皆様も取り組んでみてください。

小さな子供達に世界を知ってもらおう！

~ロシアの子供たちとの交流を通して~

サークル ABC　坂本雅子

ロシアのチェリャビンスクの子供たちと Teddy Bear Project に準じた小包交換を行いました。未知の国に対して興味津々の子供達は、ハート型のメッセージカード・自己紹介カード・小物のプレゼントなどと共に、たくさんの思いを詰め込んだ小包をロシアへと送り出し、小さいながら自分の国とは別の世界がある事を知りました。その国の同世代の子供達との交流で、その存在を身近に感じることができた様子でした。

1　はじめに

私達は、子供達を世界につなぐことに興味を持っている母とその子供達で構成されたグループです。参加している子供達の大部分が幼稚園児と低年齢であることから、まずは自分達の国とは違う国があるという事を知り、身近に感じてもらう事を目的として活動を始めました。小さい子供達にとっては、字や絵を書くことはかなり難しく、交流手段が限られる状況ではありますが、母親の助けを借りながら、世界との交流を楽しんでいます。

２．目的と方法

目的：子供達が自分達の国とは違う国があるということを知り、その国に住む子供達と交流することによって世界を身近に感じられるような環境を作り出すこと。

方法：Teddy Bear プロジェクトに準じ、ぬいぐるみ、自己紹介カード、作製した絵、小物のプレゼントをロシアの子供達と交換するとともに、普段の学校、幼稚園での生活に関する情報交換を行います。

３．活動内容

①ロシアの子供達からの小包の受け取り。
②自己紹介用紙の作成。
③交換用プレゼントの準備。
④ハート型のメッセージカードの作成。
⑤日本の季節の行事を紹介するスライドの作成。
⑥ロシアへ小包の送り出し。

４．成果と課題

成果：ロシアの子供達と交流することで、世界地図、他国の文化や言語に興味を持つようになりました。

課題：個人が中心となって活動しているため、学校・幼稚園での生活を相手国に紹介する場合、学校側の校内撮影許可や紹介内容の確認を行ってもらう必要が生じました。そのため、計画を進めるのに時間がかかり、相手側の希望に添えない場合がありました。この点は活動を続けて行く上での課題になると思われました。

Girl Rising

啓明学園中学高等学校　関根　真理

Girl Rising （DVD）を視聴することによって、教育の力と人間の精神力の強さで世界を変えられることを世界の学生と共に学ぶことが出来ます。開発途上国に住んでいる 9 ヶ国の少女達のストーリーから、とてつもない大きな課題に直面した時に普通の少女たちがどのように克服するかを示してくれます。不可能を可能とし、自分たちの夢を達成する姿から力を受けることが出来ます。

１．はじめに

マララさんの勇気ある行動に共感し、iEARN の Collaboration Center に新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについてお互いに学びたいと Teachers Forum に投稿しました。すると、iEARN のアメリカ人ファシリテーターである Ed Gragert 氏より、Girls Rising の DVD を視聴し、学びを共有したらどうかととの提案があり、このプロジェクトが 2014 年に立ち上がりました。

２．目的と方法

9 ヶ国の少女たちの置かれている現状を映像を通して身近に感じ、女子教育の大切さと授業で学んだこと、実際に立ち上げたプロジェクトを他国の生徒たちと Girls Rising の Forum に投稿することによって共有することが出来ます。Forum には 9 ヶ国の少女たちについての質問があり、それに答えることによって学びを深めることが可能です。他国の生徒と時間の調整が合えば、スカイプ会議を実施し、お互いの国の現状や学びの成果を発表し合うことも出来ます。

３．活動内容

2014 年度は、高３選択国際理解の生徒 45 名がこのプロジェクトに参加しました。Girl Rising を視聴した後、生徒達は特に思いを寄せた少女の生き方について感想を投稿しました。また、学んだことを活かすために５つのプロジェクトを立ち上げたので、それぞれのプロジェクトの内容とグループ写真を紹介しました。

これらのプロジェクトは、“Think Globally, Act Locally!”をモットーに、自分達が出来る社会貢献を目指したものです。一つは、ケニアのマサイ族の女子教育を支援する NPO を通して、女性の人権や教育について学び伝えていくというプロジェクトです。2 つ目は CSR を実施している企業の Peace by Peace Cotton Project に加わり、実際にインドのオーガニックコットンを育てながら、フェアートレードを学ぶプロジェクトです。インドの綿農家の女子高生と手紙とバナーの交換をしました。3 つ目は、ネパールでの少女誘拐の現状を SNS を利用して伝えていくというプロジェクトです。4 つ目は、8 月にカンボジアワークキャンプに参加した生徒が中心となり、NPO 法人 ASAP と共同で進めていくプロジェクトです。そして 5 つ目は、スポーツを愛する生徒が中心となり、カンボジアの子どもとスポーツを通して交流を図るというプロジェクトです。

これらのプロジェクトについては、インドの高校生ともスカイプ会議をして紹介することが出来ました。

2015 年度は、34 名の生徒が国際理解で Girls Rising に参加しています。5 月 29 日は、オーストラリアの高校生とスカイプ会議をしました。

写真１　オーストラリアの高校生とスカイプ会議

アフガニスタンの少女の映像を観た後に生徒が書いた感想を紹介します。

「アフガニスタンや中東地域において、女性の人権が尊重されていないことを何回も耳にはしていました。でも、差別の現状を映像として見るのは初めてで、大変胸が痛みました。その一方で、私はこのドキュメントを見て女性差別解消へのかすかな希望を感じました。私は、一国の「文化」はそこに住んでいる「国民」によって形成されるのであり「文化変容」を成し遂げるには、国民による意識改革が必要ではないかと思います。そのため、外部から一方的に変革を強いることは、「文化摩擦」しか起こさず、かえって女性の立場を悪くしてしまう恐れがあると思います。私は、これらの地域で起きている女性の人権を訴える声を外部の国々がサポートすることが一番良好な策だと考えています。教育を受けることが大切だと知っている私たちが、彼女たちが置かれている現状を世界の多くの人々に伝え、彼女たちのために行動に移すことに意味があると思います。　Ａくん」

「”Don’t you say you’re on my side your silence has said enough”という言葉から、私たちの行動力、言動力の無さを思わされました。いくら現状を知っていても、それをどうにかしようと一人ひとりが立ち上がらなければ、それは沈黙と無関心に終わるものだと思いました。アフガニスタンの少女たちと同じような環境にある人々がアクションを起こした時、彼女たちを支え、道を示せるような人になりたいと思いました。

募金したり、ボランティアに参加するのも良いけれど、もっと具体的に困難な状況にある人々のために対策を考えて行動すべきだと思いました。また、このような世界の問題に関心を持つ人が増えるように、学校教育で、同じ人間のために知る必要があると各国の教育システムにGirl Risingを取り入れられるべきだと思いました。そうすることによって、多くの人々が地球市民としてどう生きるべきかを考え、学び、他者を支える人材になっていくのではないかと思いました。　Ｂさん」

４．成果と課題

Girl Risingで紹介されている９ヶ国の少女たちが置かれている現状を映像で学ぶことにより、地球規模の課題を認識し、これらの問題をより身近に感じられるようになりました。少女たちは、大きな困難の中にあっても諦めず、自分たちの夢を達成するために立ち上がり、行動します。ここから生徒たちは、勇気と力を得て、自分たちも何かしなければという思いになります。Girl Risingのムーブメントは、このプロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように力づけることの相互の繋がりも生み出します。また、DVDを英語で視聴し、Forumで英語を用いて感想やプロジェクトを紹介することによって、英語力を向上させることも出来ます。

課題は、多くの国の学校が参加していますが、実際に授業で扱っている時間を合わせることが難しいことです。意見を投稿しても、それに対する返答が希望通りのタイミングで来ない場合があります。また、ただお互いの感想を共有するのではなく、共にプロジェクトを立ち上げるようにするためには、ある程度の時間の制約をお互いにもち、コミットする必要があります。スカイプ会議も実施する際に、時間調整や環境設備を事前にしっかりと確認する必要があります。iEARNの投稿する際とスカイプ会議では、英語でのコミュニケーションが必要です。完璧な英語でなくても、伝えようとする意思と努力が生徒に求められます。

Holiday Card Exchange Project の活動報告

小学２年生の放課後活動における異文化体験

東京慈恵会医科大学　栗田智子

台東区の小学校放課後活動で、小学２年生を対象に、Holiday Card Exchange Project を行った。海外の子どもたちとカードを交換することで、「外国の文化と自国の文化を知ること」と、「英語が、世界で実際に使われている共通語であるということを実感する」という当初の目的以上の成果をおさめることができたように思う。しかし、課題も多く、世界の人と文化を肌で体験できるこうした交流型プロジェクト学習の意義の大きさを学校側により深く理解してもらうことが重要であると思う。

1. はじめに

台東区立千束小学校の放課後活動で、週１回英語の授業を担当している。小学校英語は、学校での英語学習のスタートであり、なぜ英語を学ぶのかということを子どもなりに感じてもらうことは、今後英語という教科を履修する上で、重要な動機付けであると考えた。英語を世界共通のコミュニケーションツールとして使い、世界と繋がる体験の機会を模索していたところ、Holiday Card Exchange Project の存在を知り、担当している小学校２年生のクラスで参加することにした。

２．目的と方法

活動のねらいは、海外の子どもたちとカードを交換することで、外国の文化と自分たちの日本の文化を知ることと、英語という言葉が、共通語として世界で使われているということを実感させることであった。

小学校２年生が対象で、まだ英語は入門レベルであるため、自分の名前を英語で書けるように練習し、絵で日本のお正月の文化、習慣を伝える年賀状のカードを送る方法をとった。

また、日本の文化を代表する折り紙で鶴をおり、カードといっしょに送ることにした。

iEARN のプロジェクト専用の掲示板で、パートナー校の先生方に、事前に日本の正月の文化紹介の説明のファイルを送り、生徒のカードの絵を理解してもらえるようにした。相互に連絡をとり、１２月に海外にカードを発送しあい、１月初旬までに、海外からのカードをうけとり、３学期のはじめに、生徒たちにカードを渡した。

３．活動内容

実際に行った活動の内容は以下の通りである。４５分授業の中に適宜組み込んだ。

（１）プロジェクトの説明と交流国の紹介
　パートナー校の国は４か国
　　ロシア、ベラルーシ、台湾、アメリカ
（２）英語で自分の名前を書く練習。
（３）カード作成。
　表には Happy New Year!と干支の羊の絵を印刷済みで、中面に、縦書き（縦書きのことばはめずらしいことも紹介しながら）で「あけましておめでとうございます」と、お正月の絵を生徒たちが書き、裏面に自分の名前を英語で書く。
（４）折り鶴をおる。（上級生も協力）
（５）海外から送られてきたカードの紹介と感想の発表。

４．成果と課題

成果は大成功であったと思う。海外からカードをもらったことがない生徒ばかりで、実際に外国からカードが届いたことへの興奮と喜びは大きく、また多少成りとも英語学習の動機付けとなったと感じている。

また、クリスマスや新年のお祝いの習慣についての知識を得ただけでなく、文化の違いや共

通点も肌で感じられたことも、実際の交流ならではの成果だと感じた。たとえば、海外からの個性的なカードに、美しさや工夫への感動や、とても手をかけて作ってくれたことへの感謝の気持ちが生徒からの感想として聞かれた。また、４カ国の学校とも母国語と英語でメッセージがかかれており、英語が世界共通語であることも実感できていた。しかし、もっとも印象的だったことは、海外から届いたカードの中に、日本語で、「おめでとう」と書かれたものがあり、自分の国のことばを使ってくれてうれしかったという感想と自分も外国の人に、その国のことばを使ってあげたいという感想がでたことである。本プロジェクトに参加し、英語だけでにとどまらない、ことばの果たす役割やカード交換の意義に生徒自ら気づいたことは大きな収穫であった。メールでパートナー校から届いたとの写真付きのメッセージをもらい、あたたかい交流もできた。

課題としては、二つある。まず、パートナー校の規模がさまざまなことだ。例えば生徒数が１０人の学校もあれば、１５０人の学校もある。私のクラスは２０人弱の生徒数で、こうしたパートナー校の人数分カードを作ることは不可能であったため、折り鶴を人数分作った。海外からのカードは、あまり人数にこだわっておらず、ファイルを１冊おくってきた学校もあり、今後こうした工夫も検討したい。

二つ目は、学校側の制約である。まず個人情報保護のため、生徒の写真は一切撮影も公開もできないため、生徒の写真を送ってくれたパートナー校へ、こちらから生徒の喜びの表情をお見せすることができなかった。交流とプライバシーの保護とのバランスをとることが、現状の学校現場では難しいと感じた。

また海外郵送費を、区や学校が負担しないとのことであったため、カードを薄くして重さを軽くするなどの制約がでてしまった。それでも 9,000 円かかった。今年度予算申請したが却下された。こうしたプロジェクトは、講師が好きでやっていると見られているようである。放課後活動の一環であれ、行政や学校側に、こうしたプロジェクト学習の意義を理解してもらうことが、今後 iEARN の活動を広めるためには、大変重要であると思う。

写真１　生徒たちが送ったカードと折り鶴

写真２　生徒たちが描いたカード中面

Look Asia Project 2012-2014

（元）帝塚山泉ヶ丘中学校高等学校　　辻　陽一

アジアとの交流を通じて、日本の子供たちの目を、海外、特に、関心が薄いと言われるアジアに向けさせる「Look Asia Project 2012-2014」を実施。そのためのツールとして、異文化アンケート(アクセス制限あり）をおこない、その分析を通じて、相互理解を深めた。

1. はじめに（参加校）

2012　羽衣学園中学校高等学校
　　帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校
　Patai Udom Suksa School, Thailand
　　Ahmad Schook, Malaysia
2013　羽衣学園中学校高等学校
　　京都女子中学校高等学校
　Patai Udom Suksa School, Thailand
　　Ahmad School, Malaysia
2014　羽衣学園中学校高等学校
　　京都女子中学校高等学校
　　明星学園中学校高等学校（大阪）
　Patai Udom Suksa School, Thailand
　　Ahmad School, Malaysia
　Saba Girls High School, IraniEARN

助成金：
「せんだんの会」「パナソニック教育財団」
協　力：
「Multimedia Educational Forum (MEF)」
主　催：大阪私学教育情報化研究会

２．目的と方法

アジアとの交流を通じて、日本の子供たちの目を、海外、特に、関心が薄いと言われるアジアに向けさせることをねらいとし、そのツールとして、異文化アンケート(アクセス制限あり）を実施し、その分析を通じて、相互理解を深めた。

３．活動内容

2012 年

まず、教員自身の理解を深めるため、企画参加の相手校の生徒に、遠隔地授業を実施。日本の教員（米田謙三、笹恵津子）が対マレーシアに５回にわたる授業を実施。内一回は、British Council の教育企画参加校を集めた会議（対象マレーシア国内）に、日本と会場を結び、笹教諭がマレー語を交えて、アンケートをもとに日本紹介授業を実施。

アンケート内容では、日本の生徒はアジアへの関心が薄いがマレーシアの生徒は、特に、日本と韓国に関心が高いことを示した。また、日本の２校の中でも、国際交流を積極的に行っている学校の生徒はアジアへの関心を示し、もう一校と対照的な結果を示した。

2013 年

食を中心にアンケートを実施。日本の生徒は、スナックを多く食べるに対し、タイ・マレーシアの生徒は、果物を多く食べるという結果。

大阪のソウル･フードと言われるタコ焼きが、タイのカノム・クロックと似ていることから、美加の台小学校（河内長野市）とバンコク・伊勢丹の関西物産展の会場を結び、タイの生徒がタコ焼き実習を受け､美加の台小学校はカノム･クロックを作り、その様子をテレビ会議システムで両者が、共有するイベントを行った。

2014 年

生徒が関心を持つ内容をもとに、生徒自身がアンケートを作り、集計結果をもとに、ディスカッションを行う企画。生徒自らに問題意識を持たせ、データ集計・分析の重要性を学ばせることを意図した。

生徒の事前アンケートで、スポーツ（男子）と音楽（女子）に関心があることがわかり、明星学園の生徒がスポーツ関連のアンケートを作成。

これに、異文化関連トピックを加え、２０問のアンケートを作成。Kent Web の無料 cgi プログラムを利用して、自動集計アンケートと議論するための掲示板を作成。

アンケート結果で一番「衝撃的」だったのは、「生まれ変わっても、自分の国で？」という問いに、他の学校では、Yes が多かったのに対して、イランの生徒１１名中、１名のみ、Yes、他は、No。

この点について、イランの生徒たちが、他の国の生徒たちに、「なぜ、他国で、新しい経験をしたがらないのか」と問いかけたのに対し、マレーシアの生徒たちは、自国がよいので、という回答に終始した。

イランの生徒の書き込みの中に、国内の格差への不満を示す内容があったことから、「海外で新しい経験」というチャレンジ精神とともに、同国の経済状況悪化がイラン社会への不満を表わすアンケートでなかったかと理解される。

が、この問題について、マレーシアの生徒のように、自国への愛着を示す書き込みばかりで、自分の国の問題に目を向ける書き込みが見られなかった。

教師の側の取り組み不足が、その一因であるが、地理的に離れている教員の情報共有の弱さ、あるいは、カリキュラム外での実践の難しさを示すものと言える。

「死後の世界を信じるか」という宗教的な内容について、マレーシアなどから異論がなかったので、アンケート項目に加えることにした。

イランやマレーシアの生徒の多くが死後の世界を信じると回答したが、意外に、日本の生徒の中にも、一定数、Yes、と回答している。この辺も深く追求させたいテーマであったが、できなかった。

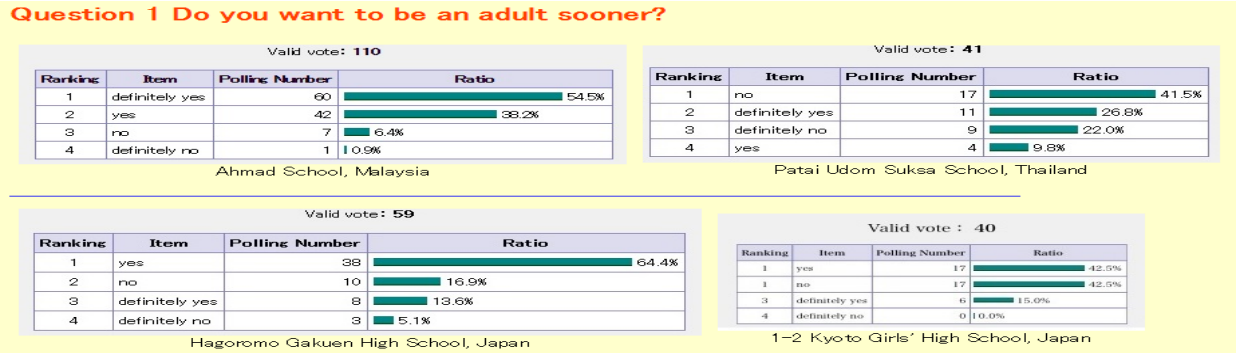
アンケート作成にあたって、宗教的・政治的内容で、書きこんだ生徒が、それぞれの国や社会の中で、非難されることがないか、多様な国の間での企画では、個人のプライバシー問題を、周到に検討しないと、思わぬ問題を引き起こすかも知れない。

イランの国内状況に触れた生徒の書き込みについて、内容それ自体は、客観的で、問題がないと思われたが、どういう視点で見られるかによって、リスクを招くかも知れないと考え、担当先生の許可を得て、削除することにした。

2014 の取り組みでは、約 400 名の生徒が参加して、アンケートに回答した。イランの生徒 11 名（実際は 12 名だが、前述の項目は一名無回答）というミニミニデータでもイラン、あるいは、生徒たちの置かれている状況を表す有意な回答が得られる。実際の各国生徒の状況をデータ化した上で、議論を進める企画は、一つの教育方法として位置づけられるのでないかと考えている。

なお、イランの Saba Girls High School は、iearn の teachers forum で呼びかけたのをきっかけに、参加を表明された。

http://yoichit.moo.jp/lap-pub/　2014 の公開ページ（英文）



ANNE FRANK Meet & Learn

JEARN　高木洋子

アムステルダム アンネ・フランク ハウスから日本国内での展示を委託された大型パネル 34 枚を国内 8 か所で展示。今後もより多くの場所でより多くの方がアンネに出会ことを願っています。http://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/

1. はじめに

「じゃあまたね、アンネ・フランクより」1944 年８月１日にそう書いたアンネは、再び、自分の日記を手にすることはなく、翌年３月ベルゲン・ベルゼン強制収容所でなくなりました。15 歳でした。このパネル展は、アンネ生誕 80 周年を記念して日本語/英語版が製作され日本に送られてきました。他の教材と共に彼女の短い生涯を伝えるものです。

２．目的と方法

パネル展の開催希望校は、Home Page にあるカレンダーを見て開催期間を決め、オンラインで申込むことができます。前開催地と本事務局とともにパネル移動に関する打ち合わせをし、パネル到着後に開催します。終了後は事務局にパネルを使った授業報告・生徒たちの感想やメッセージ・数枚の写真を提出します。各開催地からのこれらの報告は、Home Page”アルバム“上に掲載されます。尚、次の開催地までの運送費を原則負担するというルールがあります。展示に併せて、ミュージカル「ANNE FRANK(アンネの日記)」DVD を購入することもできます。更に英文の Anne Frank Reading/Writing 教材もダウンロードの上、クラスで使うことができます。詳細は以下の HP をご覧ください：
http://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/

３．活動内容

私たちが大切にしていることは、パネルを長期間寝かせないという点にあります。できるだけ多くの生徒や大人にアンネに会って欲しいからです。そのために開催を希望する地の情報収集が、その後の開催と終了までのお世話と同様に大きな仕事です。

また、常時、アムステルダムの ANNE FRANK House と連絡を密にして情報交換をしています。特に東京都杉並区の多くの図書館で発生した ANNE FRANK の本の破損という犯罪が起きた後は、アムステルダムと私たちの間に更に密接な絆が育っています。パネル展と日本各地の「アンネのバラ展」との共同開催も実現してきています。

４．成果と課題

2014 年度の開催地は、次の8箇所

7 月―福島県立医科大学
8月―同志社中学校・福島県立医科大学(再)
9 月―甲南中学校・高等学校
10 月―明治学園　白金祭
11 月―同志社国際
12 月―神戸学院大学
2 月―Marist International School
3 月―Canadian Academy

年間10箇所のパネル展開催を目指していますが、パネルを寝かせることなく、開催地をつないでいく困難さがあります。また、開催地が次の開催地への運送費を心配することなく展示を企画できるよう寄付を集めることも課題です。

http://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/

５．その他資料

表1.アンネ・フランク資料一覧

1　アンネフランクポートレイト
2　1929年　両親の結婚
3　第一次世界大戦 ドイツの危機
4　4才まで
5　ヒットラー選挙で勝利
6　オットーフランクの言葉　私をとりまく世界は崩壊した
7　独裁
8　オランダ
9　ドイツのナチス化
10　三姉妹
11 1935年人種差別法
12　私たちの生活は不安ととなりあわせだった
13 1938年　ユダヤ人への迫害
14 1939年　戦争
15 1940年　ユダヤ人苦難のはじまり
　　オランダへのドイツ侵攻
16 隔離
17 反ユダヤ法
18 1942年6月12日　日記のはじまり
19 1942年7月5日　呼び出し
20 隠れ家と住人
21 隠れ家・図・写真
22 机と部屋
23 直筆　作家になりたい
24 日記より 1944年8月1日
25 1944年8月4日　裏切り 通報
26 オットーフランク　ヴェステルボルク収容所
27 オットーフランク　アウシュビッツ収容所
28 ベルゲン・ベルゼン収容所
29 解放　地図
30 オットーフランクがマルゴーとアンネの死を知る
31 1947年　出版
32 戦争犯罪
33 平和維持　人権
34 アンネ・フランク財団

Adobe Youth Voices 2014

AYV Japan 伊藤文・杉本範雄・高木洋子

1. はじめに

Adobe Youth Voices（通称AYV）は、Adobe財団の社会貢献事業の一環で『動画やポスター等のMedia（作品)』製作を通して中・高校生が創造的な映像感覚と製作技術を身に付け彼らのメッセージを世界に発信する活動である。
2006年AdobeとiEARNほかの共同プロジェクトとして発足し、現在は13才～19才を対象に60カ国5000人のAYVオンライン研修コースを受けたEducator、190,000人の13～19才のユースが育っている。

２．目的と方法

目的：

iEARNに用意された8週間の英語によるオンライン研修プログラムを受講してAYV Educatorの資格を取り、生徒はEducatorsの指導で”Youth Voices:Create with Purpose”を映像作品に仕上げて発表する。

グローバルなチームの中で教育者自身がアドビソフトの使い方、映像作品制作のスキルの強化、対話力の向上、国際感覚を磨くプログラムが用意され,自由な時間に取り組める貴重な機会であり、生徒は、製作を通して、ビジュアル表現・デジタルスキル・語学力・グローバルな視点を掴むことができる。

実施方法：

○AYV コース参加者以下のソフトが支給される
Adobe Photoshop elements最新版
Adobe Premiere elements最新版
各校25本のインストールランセンス付
○グローバルなオンライン8週間教員研修・交流ー受講無料（2コースから選択　9月・2月）
○8週間完走者には、(指導者資格)を授与
AYV Educator Certificate授与
○受講者の生徒対象の制作ワークショップ
“Create Media Day!“への参加。
指導者　Media Mentor Mr. Kenji Lee
○生徒作品の国内外での発表（海外コンテストへ応募）
海外―AYV AWARD へ応募/iEARN Conference Brazil Media Festival 応募
国内-AYV Japan Media Festival 発表 東京
○映像ほか創造的なプロを目指す生徒はAdobe Foundation Scholarshipへ応募することができる。

尚、Educatorの時間的理由や、英語コースの負荷を減らすために、JEARNのAYVメンバーは以下のサポートを行う。

１．当プログラムの総合ガイド日本語版提供
２．コース各週の日本語によるガイドの提供
３．ビデオ教材の日本語訳の提供
４．コースに付き添う日本語メンター支援
５．8週間コースの事前ワークショップ開催
６．コース後半の強化・完走へ支援
７．情報交換や相談ができるJEARNコミュニティ「AYVひろば」（日本語）
８．AYV Community News配信（英語・日本語）
（注意)AYV参加者でJEARN会員でない場合は、JEARN/iEARN会員登録が必要。

３．活動内容

7月：アルゼンチンで開催されたiEARN Conference でのAYV workshops参加
7月：iEARN Media Festival Night参加
9月：東京コース事前ワークショップ
（於）服飾学院大学

AYV Online Course Session One:September 29ーNov2３ ,2014

2名参加・完走
Educators Webinars 4回 Adobe soft使い方
11月：奈良県教育委員会訪問・AYV紹介
11月：東京“Create Media Day with KENJI”
http://www.jearn.jp What’s New
″Adobe Youth Voices″日本発プロモーションビデオご覧ください

11 月：AYV 金沢センターで Kenji ワークショップ・大学講義（報告後述）

図 1　AYV 金沢センター研修会報告 2014. 11

2015年

1月：2月コース募集

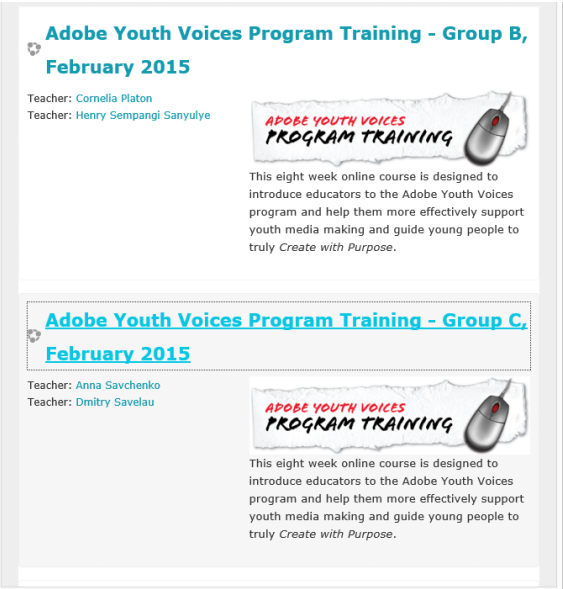


図2　AYVのコースの入り口website

2 月：コース前ワークショップ大阪　開催
　　高槻現代劇場集会室

2 月：コース前ワークショップ東京　開催
　　JEARN 四谷事務所

AYV Online Course Session Two: February 13-April 13, 2015
　　15名参加・10名完走

2 月：国立教育政策研究所総括研究員白水さんへ AYV 報告

2 月：Lisa、AYV　Community へ AYVJapan News アップ・JEARN ニュース配信

2 月：Adobe Foundation Patricia Meeting in Kyoto. Kenji/ Bee/ Yoko

3 月：文科省生涯学習政策局情報教育課報告

４．成果と課題

成果

iEARN AYV 提出作品で、秦　彩乃さんの作品：First Magic of a Fresh Witch が入賞。iEARN Conference Media Festival で上映。(リポート)

2014 年 9 月コースで 2 名の、2015 年 2 月コースで 10 名の Educators が誕生。相変わらず 8 週間のグローバルなオンライン研修コースは難関ではあるが、完走率も上がり、苦労はされてもその充実感・達成感を表明される先生が増えた。(コース体験記参照)、英語が苦手でも完走された先生も多くおられることを特記したい。

Media　Mentor として Kenji さんを得て、11 月に開催した“Create　Media　Day”では参加生徒による魅力的な AYV プロモーションフィルムが完成し、更に彼は金沢や神戸の学校や大学へ足を運び、直接生徒・学生たちを指導した。

更に AYV Japan Lead Edicator 伊藤文、杉本範雄によるワークショップ指導、メールや SNS での的確なガイドや支援によって本事業が進められた。

課題

課題は、まだ認知度が低く、コース参加者数が少ない。コース完走にエネルギーが使われ、また学年末から新学年への移動の時期でもあり、肝心の生徒たちの製作へ繋がらないケースが多く見られる。やはり 9 月コースを中心に、その後の各学校での生徒による映像製作を丁寧に支援する必要があると思われる。

^^^

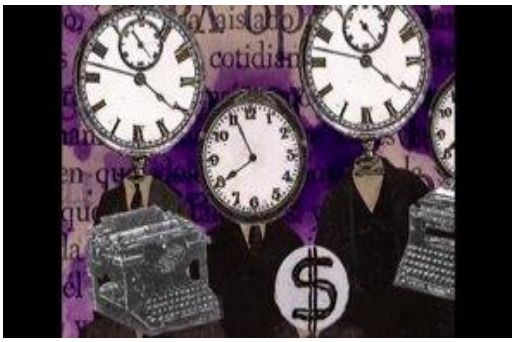
2014 iEARN Adobe Youth Voices Media Festival

JEARN 高木洋子

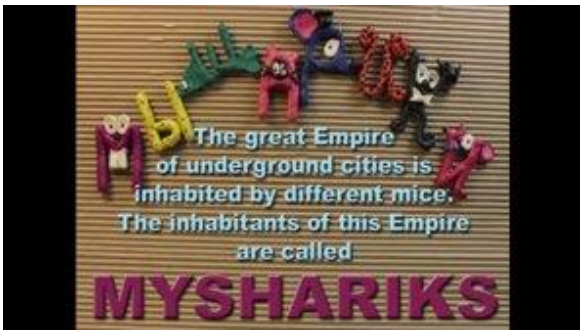
Adobe Youth Voices Film Festival がホールで開かれました。選ばれた生徒たちの作品12編が上映される楽しみな時間です。 日本からは秦 彩乃さんの作品が選ばれ、今後の Adobe Youth Voice Japan にとってもモーティベーションを高めるいい刺激となりました。皆さんもクリックして個々の作品を楽しんでください。Adobe Youth Voices Media Festival-Hall http://vimeo.com/album/2947795

1. 2014iEARN Adobe YouthVoice MedaiFestival の様子

2. 2014iEARN Adobe YouthVoice MedaiFestival 作品集



Time of progress iEARN -Argentina



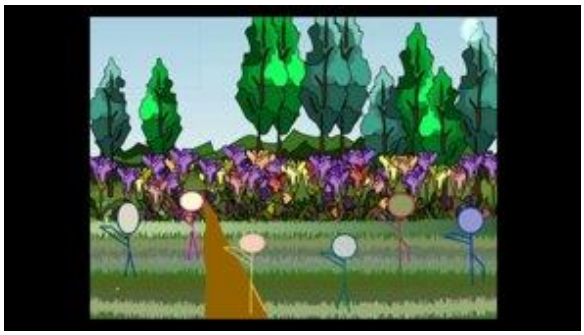
Myshariks - Mouseland, iEARN-Russia

Life is Boring, iEARN-Taiwan

First Magic of a Fresh Witch, iEARN-Japan
★Japan by AYANO

Get a Life, iEARN-Romania

taiwan2



For the Purity of the Whole Earth, iEARN-Belarus

Russia 2

Virtual World Addiction, iEARN-Brasil

Life, iEARN-Romania

A Day at Our School, iEARN-Netherlands

Choosing a Bride in Black & White, iEARN-Pakistan

AYV 金沢センター研修会報告

メッセージ性のある映像制作のため発想力の育成

金沢星稜大学　清水和久

Kenji 氏を迎え、映像制作のための研修を金沢星稜大学の学生を対象に実施した。映像の作成には、最初にキーワードを決め、伝えたいことを明確にすることが重要である。また作成のテクニックとしては、数種類の異なったシーンをこまぎれにタイムラインに沿って流す手法が有効であることが分かった。

1. はじめに

映像作成のためのストーリの作り方の基本を学ぶために、映像作成を仕事とする Kenji 氏を迎え、ストーリの作り方を学ぶこととした。編集のための具体的なソフトの操作ではなく、基本的なストリーボードの作成方法を学ぶ

２．目的と方法

研修会の実施日時

日時　平成26年11月21日(金)9:00-12:00
場所　金沢星稜大学メディアセンター
講師　**Kenji DuBois Lee**
対象　金沢星稜大学学生 10 名
準備物　シーン切り取り用の ipad10 台

３．実際の活動内容

〇研修の進め方

1）メッセージの伝え方

・心を伝え合う方法演習
紅葉のきれいさを伝えるにはどうするか？

2）キーワードを伝える

・メッセージから連想できるキーワードをたくさん予想する
・キーワードは名詞、形容詞、動詞にわけて予想する
・今度はキーワードからメッセージを当てる
・5W1Hを入れ込む

3）タイムラインルール

・数種類の異なったシーンの映像をこま切れにして流しても、それぞれのシーンがタイムラインにそって流れているのであれば違和感がないことを実際映像で実感。

4）180度ルール

・インタビューのシーンを撮るときは、2人の場合はその2人を結んだ直線の片側から必ず撮影すること、この直線を超えて撮影すると視聴者が混乱する

5）絵コンテの作り方

・iPadを活用した絵コンテの作成
絵の代わりとして10台のiPadを使用し、1台ごとに静止画を撮影したうえで、絵の代わりとして使用。1台ずつのiPadを並べなおすことで絵コンテを作成した。なおiPadなので1つの写真をアップやルーズに変えることが可能であった。

・紙芝居の作成
2014 年度の AYV の作品をもとに kenji 氏がキーシーンを切り出して絵に描いたものをもとに、グループごとに並べなおして話を作りなおした。効果音、音声などはその場で即興的に言いながら撮影をすることで簡易動画を作成した。

〇参加者の感想

研修の様子をわかってもらうために参加の

・ビデオの作成についてKENJIさんにおしえていただいた。構図や音楽の強弱を変えるだけで全然違うことに気づかされました。しかし一番大切なのは「メッセージ」自分の思いや気持ちを伝えようとする心が基盤になるというのが何にでも当てはまることであり、いい学びになりました。に日の生活においても、人間関係を築いたり、プレゼンをしたりするうえで主張を

することの大切さに気付かされました。「メッセージ」「キーワード」がこれからの課題になりそうです。（あやか）

・パソコンを使って画像の編集を学ぶのかと思っていたら、その作業に入る前のメッセージの考え方や伝える側の気持ち、相手の気持ちからまず教えてもらいました。単に相手の言葉、メール、電話、ジャスチャーで伝えるにしても何か伝えたいことがあるから、そのツールを使うので、まぜそのツールを使うのか、一番伝えたいことは何かを考えて気持ちを伝えるようにしたいと思いました(かなこ)

・ビデオのアングルのとり方はすごく勉強になりました。視線をつなぐ方法は直線をまたいではダメなことを初めて知った。このようなことは大変面白く、で差が出るところだと思った。これから映画やドラマを見るときは今日習ったことに気を付けてみたいと思います。そして一番大事なメッセージは何なのか、どこにあるのかを探したいです。そして自分も今日習ったことを生かして動画を撮ってみたくなりました。（かよ）

・写真やビデオを撮るときにも使いたい伝えたいメッセージやキーワードを意識することがわかりました。伝えたいメッセージやそのメッセージのキーワードで写真を撮るときだけでなく日々の生活の中でも意識しながら暮らしていきたいと思いました。（はるか）

・機器の使い方より大事なのはメッセージだということを学びました。キーワードを決めておいたり、相手が何を言おうとしているのかを考えたりする活動はとても楽しかったです。またメッセージは相手とのやり取りがあってはじめて成り立つことがわかりました、これらは相手に伝えたいことの内容を大切にして相手のことを考えてメッセージを伝えようと思いました。また、ビデオはタイムラインの組み合わせ方や遠近などによってとても違うのだということがわかって面白かったです。私はとても映画が好きでそれから会議にも行きたいと思っているので海外の様子のビデオを作ってみたいなあと思いました。機会があれば編集のこともっと学びたいです。（いよ）

・相手の考えを想像し、自分の思いを伝えることがいかに大切か、メッセージの持つ意味とともに改めて知ることができました。今後子供たちに伝えていきたいです。（こうし）

・今日の講義では動画づくりのポイントについて学びました自分自身の動画づくりに興味がありとても充実したものとなった。その中でもkenji さんの「相手がどう考えるのか、どう感じるのか」を考えることが大切であるという言葉が印象に残りました。相手意識をもって伝える。それにプラスアルファ―として技術や能力が備わってくると思いました。まずは自分の伝えたいメッセージを考えることを意識したいと思いました（ともや）

４．成果と課題

・ソフトの編集作業の前の段階のメッセージの関あげ方や、伝える側の気持ちをいかに作るかを学んだ。

・実際の結婚式のビデオのストーリを見て、1つのビデオに複数の物語が同時に進み、最後にそれがつながるなどの構成方法を学んだ。

・何をどのように伝えるといいのかをまず考えることが重要であり、日ごろ問題意識を持つことが重要であることがわかった。

図１　インタビューをとる角度を考える

図２　静止画を並べて、ストーリの考察中

Adobe Youth Voices オンライン研修コース体験記

奈良県立法隆寺国際高等学校　山本英樹

1. はじめに

Adobe Youth Voices のオンライン研修コースでは、グローバル社会に対応した教育に必要とされている 21 世紀型スキルの養成、また Active Learning や協同学習の観点からも役立つ内容であったと思います。

今後の教育に必要となる指導スキルだろうと思われます。そういう意味では Adobe Youth Voices という単一企業のプロジェクト参加目的の研修というよりも、寧ろ教員として自己研鑽する良い機会であったと捉えています。

2. 活動の内容

応募当初、英語科教員として Photoshop や Premiere の使用技術の点で不安はありましたが、コースの主眼は動画制作プロジェクトの実施手順や実践方法だったので、自分にとって意義のある研修として捉えられました。勿論技術面での指導もありますが、チュートリアルビデオでの指導で解り易くとても役に立ちました。

１）実際の研修内容「場面構成の指導」

場面構成には、Storyboard の技法を学びました。デジタルではなく、アナログでストーリー展開を考えるという手法で、この活動を通じて、全体像を生徒にイメージさせ、首尾一貫した展開を考えさせるといったもので、活動実践に役立つ内容でした。

２）実際の研修内容「同じ受講生とのメッセージのやり取り」

メッセージボードで他国の研修受講者と英語で意見交換する課題もありました。単に知識や技法を享受するだけでなく、過去の作品を鑑賞して意見を述べ、実際に作品を創作し、お互いに意見交換する機会がありました。

国籍の異なる受講者と英語で意見交換するのは楽しい交流の機会でした。

図１　adobe youthvice 公式 website
https://youthvoices.adobe.com/

3. 成果と課題

しかし一方で作品制作等の課題は大変な作業でもありました。実際、仕事をしながらでは時間の制約上厳しく、途中で諦めそうになりましたが、グループの指導者や日本の担当者から激励のメッセージを頂き、最後まで到達することが出来ました。今振り返ってみて、もっと時間をかけて深く学び、できれば復習の機会を持ちたいと思っています。

今後は Adobe Youth Voices のプロジェクトだけでなく、授業の活動や国際交流活動等課外活動にも研修で学んだことを活かし、生徒へ還元していきたいと思っています。具体的には生徒達が作品制作を目標に創作活動を協同学習にて行い、批判的思考を働かせて議論を重ね、Photoshop や Premiere 等の使用によって ICT スキルを駆使し、動画作品を外国の生徒達と共有し、英語コミュニケーション能力を養う。そして、生徒がまたやりたいと思える活動の実践を目指していきたいと思います。この様な目標を持てただけでも研修の意義はあると思います。

AYV コースに参加して

えーわいぶ？　ＡＹＶ？？何ですか？

北陸学院高等学校（石川県）　平田　純

ＡＹＶに初めて参加して、8 週間にわたり、世界の先生方と一緒にコースに取り組みました。1 週目は、一緒に学ぶ世界中の「同志」たちとメッセージを交換しながら進めていきましたが、次第に遅れだし、何度もやめようと思いました。そんな時にＡＹＶのスタッフの皆様から励ましをいただきなんとか完走することができました。高校で授業を受けている課題提出が遅れている生徒の気持ちが実感できました。

1. はじめに

私はＩＣＴ教育に強く興味を持っている英語教員です。ＩＣＴ教育の研究、研修を重ねる中、ある大学の先生に出会いました。気さくでありながら、広く深く、ＩＣＴのみならずさまざまな知識と経験をお持ちの先生です。もともとタブレットを使った授業や電子黒板等に興味はありましたが、生徒と世界をつなごうなんてことは、思ってもいませんでした。そんな時にその先生から『ＡＹＶ』という言葉がでてきました。まったくの未知の単語でした。『数週間のコースを受講したら編集ソフトも与えられる』といった言葉だけが最初は耳に残り、思わず『やります』と言った（言ってしまった？）ことを覚えています。

２．活動の方法

自分の中にカメラ小僧の一面もあり、写真や動画には以前から興味はありました。生徒に英語を使った動画を撮影させたこともありました。今回はそれをもっと本格的に制作することができるチャンスだと、次第に思うようになりました。受講するコースは８週間。世界中のひとたちとオンラインでつながりながらインターネット上でスキルを上げていきます。

３．実際の活動

自分の発したコメントに返事が寄せられ、自分もまた数千キロ、それ以上に離れた『同志』たちにコメントを送ります。ＳＮＳが盛んになったこのご時世、そんなこと当たり前なのかもしれませんが、自分にとってはほぼ初めての経験でした。その経験ができただけでも、今回Ｖコースに参加した価値があったのだと思います。

しかし・・・原因は自分自身の力量のなさに他なりませんが、次第に進行が遅れていきました。１週間、２週間、３週間・・・　課題を遂行できないまま時だけが流れていきました。言い訳からさせていただくと、４月から勤務校が変わり、環境が一変してしまったのです。

あきらめようと思いました。もうやめようと。ちゃんともっともっと深く内容を把握してから申し込むべきだった、と。悩みました。後悔しました。反省しました。自分を責めました。

でも、すごいです。本当に困ったときには助けてくれる人っているものです。今回、自分の課題が停滞しているときに、会ったこともない方々から、愛情に満ちた多くの励ましをいただきました。まさかこの年代（３０代後半）になって課題を終わらせるための励ましをいただけるとは・・・　励ましてもらう生徒の気持ちがわかったような気がします(笑)。

４．成果と課題

多くのみなさまのご支援とご指導のおかげで、無事８週間のプログラムを終えました。久しぶりの大きな達成感だったと思います。この場を借りて、改めて支えてくださったすべての方々にお礼を言わせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。ここで得た喜びとスキルとエネルギーを、目の前の生徒たちにいずれ還元したいと思います。

Hiroshima for Peace

JEARN　高木洋子

絵本を使って広島・長崎のことを知り、平和を考え、平和を発信する

1. はじめに

このプロジェクト誕生のきっかけは、2004 年黒姫高原童話館で松谷みよ子さんの絵本「まちんと」に出会ったことです。この本を通して世界中の子どもたちに広島・長崎を伝えたいと松谷先生とご相談をしながら、2006 年オランダで開催された iEARN Confrence で iEARN プロジェクトとして立ち上げました。早くも 10 年目となります。2014 年度には被爆者森本順子さんの絵本“My Hiroshima”と”はだしのゲン”も加えました。

２．目的と方法

このプロジェクトのねらいは、世界で唯一の被爆国が発信できる広島・長崎の意味を学校教育現場の児童・生徒が理解し次の世代へ伝えることです。

具体的には、絵本を導入とし、広島・長崎を知り、iEARN Forum へ感想を書き、現在子どもたちが泣いている地域を調べ、自分たちの平和の絵本・ビデオを創作し公開する。

2014 年度の　iEARN 会議で発表する筆者

３．活動内容

2014 年度本プロジェクトは、アルゼンチン Puerto Madryn で開催された iEARN Conference で参加国･参加校募集を行った。初めて Spanish 系の学校参加があり、iEARN Forum も英語と Spanish の両建てとなった。

参加国

・Puerto Rico・USA（２校）
・New Zealand・Canada（２校）
・Argentina（７校）
・Sli Lanka・Colombia・Australia（２校）
・Bangladish・Ukraina・Russia

参加国への 2 冊の絵本の送付・参加国教員や生徒たちによる Forum 投稿への対応・更に今までに創作された約 160 冊の絵本の日本での展示が主な活動です。

４．成果と課題

ウクライナ･ロシアが参加したことで、広島・長崎だけでなく、チェルノブイリや福島、更にはロシアで長年隠されていた Mayak 原発事故へと生徒たちの学習・投稿が広がりを見せています。

また、2014 年度の生徒たちの平和をテーマとした作品は、例年の絵本やポスターよりも Film 製作が多く、本プロジェクトギャラリーにアップされています。

このように活発な参加各国に対し、肝心の日本からの参加校がゼロであり、Forum 投稿への日本からの対応がコーディネータのみであるのは残念なことです。

青少年ペンフレンドクラブ活動報告

日本郵便株式会社　本社　切手・葉書室

青少年ペンフレンドクラブ

1. はじめに

「Peace（平和）」「Friendship（友愛）」「Culture（教養）」という三信条を活動目標とし、日本国内はもとより世界中の友達と手紙を交換しながら世界で起こる様々なことを知り、平和な社会をつくることを目的とするクラブである。１９４９年６月に郵便友の会として設立され、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

２．目的と方法

手紙のやり取りを通して国際親善、国際理解、相互理解の促進に努める。

交流機関は、2014 年４月から 2015 年３月

表１　交流機関と交流国

	掲載号	国名	学校名	数
2014年	4月号	アメリカ	High Mountain School	130
	6月号	台湾	Zhuwei High School	44
	9月号	ケニア	Friends School Bokoli	3
	10 月号	台湾	Zhuwei High School	13
	11 月号	台湾	Zheng De Junior High School	6
	12 月号	台湾	Tamakang High School	17
		アメリカ	All Saints Academy	20
2015年	1 月号	台湾	New Taipei Municipal Sanzhi Junior High School	4
		オランダ	Canisius	17
	2 月号	アメリカ	All Saints Academy	14
	3 月号	アメリカ	Saint Joseph Grade School Sherman	7
		アメリカ	Saint Joseph Grade School Saluccio	12
		オランダ	Canisius	26
	合計	4 か国	11 校	313

３．活動内容

2014 年度（2014 年４月～2015 年３月）においては、毎月１回ＰＦＣ会員向けに発行の情報誌「Letter Park」に海外ペンパル紹介コーナーを設け、iEARN 及び JEARN のネットワークで展開するＰＦＣプロジェクトにより海外ペンパルのアプリケーションを入手し、ペンパル紹介を行った。

259 名の海外ペンパルに対し、日本人からの文通申込みは 313 件であった。（表１）

４．成果と課題

iEARN 及び JEARN のネットワークから多くの方を紹介いただき、日本の小・中・高校生を中心に、手紙のやり取りを通した海外交流の橋渡しができた。

しかしながら、日本と海外諸国では、夏季休暇等の休みが異なるため学校に届いた郵便が、本人に届くのに時間がかかったケースがあった。紹介システム上、最大で２カ月程度の期間を要する場合があるので、できるだけ早く紹介できるように努めたい。

また、日本にとってなじみの薄い国への紹介応募件数が少なかったので、今後の検討課題としてそういった国の紹介を行い、さらなる日本人と外国人の文通相手の紹介の橋渡しを行いたいと考える。

図１　ペンフレンドクラブ WEB サイト

大学生による 100 人村ワークショップの活動報告

世界に関心を持ってもらうためのワークショップの在り方

金沢星稜大学　清水和久

総合的な学習は最初に共通体験が必要であるといわれるが、国際理解に関わる共通体験は持ちにくいのが現状である。本実践では、子供たちが世界の住人になって参加できるワークショップ版「世界がもし 100 人の村だったら」(開発教育協会)をもとに本校の大学生がアレンジして小学校現場で行なった。結果、小学生の世界に対する興味関心を深めることができた。

1. はじめに

近年アクティブラーニングや参加型学習に焦点が当たり始めている。ワークショップ型学習は学習者が体験しながら、学べる点でアクティブが学習方法といえる。特にワークショップ版 100 人村は、学習者が世界の住人の 1 人になって活動できるところに面白さがあり、身をもって世界の情報を体感できるところに優位性がある。また、この学習を大学生が小学校に複数回出前ワークショップという形で実施することにより、大学生の腕前も上がっていく。

２．目的と方法

・研究目的

国際理解教育の導入学習として体験型学習である「100 人村ワークショップ」の有効性を明らかにする

・具体的方法

１）「ワークショップ版世界がもし 100 人村だったら」のねらいと位置づけ

２）ワークショップの効果の測定のためのアンケート調査の実施

下記の項目について 6 件法+自由記述で調査

①　楽しかったですか
②　内容がわかりましたか
③　世界のことが知りたくなりましたか
④　その他思ったこと

３）学生の意識の変容

ワークショップを行った学生の意識の変容について調査する。

３．研究の結果

4-1　100 人村ワークショップの実施内容

１．男女の比率
２．世界のこども大人や老人の比率
３．日本のこども大人や老人の比率
４．*世界の就学状況(新規)
５．識字の比率 （文字を読めないことのリスク体験）
６．大陸の分布（住人の比率）
７．世界のことばでこんにちは （日本語は少数言語、英語学習の必要性）
８．飢餓人口の人数（食料充足度の比率）
９．*食糧問題（国別１週間分の食料の写真提示）
10. 貧富の差の実感（世界のルールでアメの配布）
11. *開発途上国での体験談 （学生によるフィリピンの孤児院体験談）

＊は元の「ワークショップ版 100 人村」に追加したオリジナルの内容である。

以下上記メニューより抜粋して様子を述べる。

○４「世界の就学状況」

同世代の子供の現状を理解することをねらいとする。これは「100 人村」のコンテンツにはなかったので、「世界一大きな授業」の教材から「学校に通える子の人数や、ドロップアウトする人数、その理由などをクイズ形式で提示した。学校に関する情報は子供たちにとって興味がわくものであり学校を途中でドロップアウトする子供の数が 5 人に 1 人という事実にはびっくりしていた。

○５「識字の比率」

高熱で苦しんでいる母のために、子供が薬をもらいに行くのであるが、薬箱うにおかれているものが、「殺虫剤、下剤、熱さましの薬」の３つであり、文字を読めないために、選択で迷うという設定である。ワーク参加者に選択を迫り、文字を読めないことで困ることを体感してもらった。

○７「世界の言葉で「こんにちは」

世界が 100 人の村だと日本語を話せる人は 2 人。中国語は 18 人、英語は 8 人となる。この情報では中国語を話せる方がよさそうだが、学校で英語を習っている人数は 30 人ほどになるので、英語を話せれば、世界の 1/3 の人と話すことができることになる。特に自分の国の言葉を話す人口が相対的に少ない国は英語を学習することで世界の人口の 1/3 の人と話すことが可能なるという事実から英語学習の必然性を感じていた。

○10　貧富の差の実感

世界の貧富の現状に従って富（アメ）を分けると富裕層 20 人で 82 個、中間層 60 人で 16 個、最貧層 20 人で 1 個となる。

富裕層は、初めは多くもらえて喜んでいるが、周りからの冷たい視線を感じることで、積極的に分けたいと思いを持つようになる

中間層は、自分たちが人数の割に飴の数が少ないことに気づき、ともすると力ずくで豊かなグループから奪うという言動も見られた。

貧しいグループは、1 個というあまりの少なさに気力も萎えている場合が多かった。

4-2　アンケート結果

表１．ワークショップ後のアンケート結果

質問項目	3+	2+	+	−	2−	3−
１．楽しかったですか	80 %	15 %	3 %	1 %	1 %	1 %
２．内容にわかった	58 %	27 %	9 %	4 %	2 %	2 %
３．世界のことを知りたいか	63 %	22 %	10 %	2 %	1 %	2 %

合計 9 校、述べ 500 人の児童に 100 人村のワークショップを行った。(n=467)　数字は%

楽しかった理由としては、自分がその村の住人となって参加できること、クイズ形式で答えを予想し考えることできたことがあげられる。

内容理解に関しては、3、4 年生の場合は既習の知識外のこともあり少し難しかったようである。世界に関する興味関心は高く、いつもは自国の生活が当たり前と思っていたが、アメの不公平な分配など自分にとって理不尽な分配を受けるなどを体験することで、その原因を知りたいと思ったり、海外に目を向けたいという児童が増えた。

4-3　学生の変容

6 月にワークショップを始めた当初はテキスト通り行っていたが、回数を増すごとにオリジナルの情報を付け加えていき、9 月に学生自身がフィリピンの孤児院にボランティア活動に行った後のワークショップは、学生自身の体験も加わって説得力のある写真の提示や話し方ができるようになった。

写真 1．実際のワークショップ実施の様子

４．成果と課題

国際理解の学習は、外国のことを本やネットで調べることが多いが、この参加型学習では世界の住人の 1 人となって感情移入をすることがができた。また、実施する学生も複数校で実施できるため、教師を志望する彼らには良い経験となった。

学習者の出発点は、「日本に生まれてよかった」というところから始まるが、その後実際の国際交流の実体験が続けば、等身大で相手を意識することができるようになる。そして、相手の顔の見える交流に発展させることによって、「援助と被援助」の関係ではなく、共に生きているんだという実感の糸口としたい。

平成 27 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（ＳＰＨ）指定の報告

（元）名古屋市立名古屋商業高校長　栗原寿男

平成27年4月、名古屋市立名古屋商業高等学校が、文部科学省から平成27年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（ＳＰＨ）の指定を受け、平成27年度～平成29年度（3年間）専門高校において、大学・研究機関・企業等との連携の強化等により、社会の変化や産業の動向等に対応した、高度な知識・技能を身に付け、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としています。

1. はじめに

研究開発課題

「Think Glocally,ActGlocally.
～世界ハ我市場ナリ～」

「職業バカロレアとアクティブラーニングによる世界を視野に地域で貢献し、ビジネスを創造・構築できる人材の育成」

２．研究開発の概要

世界を視野に地域で貢献し、ビジネスを新たに創造・構築できる人材を育成するため、下記の５つの教育プログラムの開発を行う。

併せて、海外での生徒の体験・実習に関する教育プログラムの開発を行う。

（１）職業バカロレアの試験手法に対応した授業の導入による、思考力、判断力及び表現力のある人材の育成
（２）アクティブラーニングの学びによる、専門的な知識や技術・技能を活用・応用する力とチャレンジ精神を有する人材の育成
（３）長期の勤労実習「ジョブチャレンジ」の実施による、確かな職業観・勤労観の涵養と実践力のある人材の育成
（４）グローバルビジネス実践プログラムの開発による、グローバルな視野でビジネス活動を実践できる人材の育成
（５）地域貢献プログラムの開発による、地域の課題に対する高い意識と地域貢献への意欲を持ち、行動できる人材の育成

３．これまでの経緯

名古屋商業高校は、1990 年から米国ミシガン州の Marilyn Schlief 先生のクラスと国際パソコン通信を利用した国際理解教育を始めました。

その後、Teleclass International と Teleclass Japan のネットワークを利用してテレビ電話を使った授業を高木洋子（当時代表）の特別講師としての指導により行ないました。テレビ会議システムを使った授業も jERARN のサポートで米国、豪州、ニュージーランド、台湾の学校との間で実施しています。ネット利用授業や相互交歓訪問・留学や海外研修旅行、姉妹校提携とか修学旅行などへと発展した礎となっています。これからの SPH としての様々な教育実践が期待されます。

Marilyn Schlief 先生からのメッセージ

Congratulations!! Your students will think and act locally while keeping a global perspective of international issues. How can I help?　~Marilyn
Marilyn Nagano Schlief Coordinator of English Programs
The Japan Center for Michigan Universities